

茨木市安威0号墳の粘土槨について

清水 邦彦

1. はじめに

安威0号墳は安威古墳群のなかで、最も西に位置する古墳である。1981年に茨木市教育委員会による調査がおこなわれ、その調査の概要が報告されている（奥井1982）。上方作系浮彫式神獸鏡や斜縁神獸鏡など中国後漢代の青銅鏡や石釧などが出土しており、三島地域の前期末から中期初頭に位置づけられる古墳として知られている。

安威0号墳の埋葬施設である粘土槨については、奥井1982では文章と写真のみの報告であったが、『新修茨木市史』でその平面図が報告された（廣瀬2014）。本稿はこの平面図に加え粘土槨の断面図を紹介することで、粘土槨についてより詳細な報告をおこない、安威0号墳の評価に資することを目的とする。

なお、安威0号墳の概要については、本誌別稿（河野・清水2016）で述べたため、本稿では省略する。

2. 安威0号墳の粘土槨について

安威0号墳では、1号粘土槨と2号粘土槨が検出されている。その平面図と断面図を図1に示した。両者は重複することなく、独立した墓壇をもつ。そのため、「2基を一組とするような整然とした位置関係にあることから、近しい時期に相次いで埋葬がなされた」と推測されている（廣瀬2014）。

1号粘土槨と2号粘土槨の先後関係についてみておく。2号粘土槨は1号粘土槨を構築する際に盛られた13層を切って構築されている。この切り合い関係から、1号粘土槨⇒2号粘土槨の順に構築されたと考えることができる。以下、粘土槨ごとにみていく。

1号粘土槨 9～12層は粘土である。13～16層は黄褐色から白濁色を呈する砂層で、盛土である。6・7層はジャリ層・砂層で、棺の陥没にともない流入した層と考えられる。7層上面では赤色顔料が検出されており、木棺底部に塗布されたものと推測される。5層は粘土槨を構成する粘土の再堆積である。粘土槨の断面形状から、棺は割

竹形木棺と考えられる。

2号粘土槨 1・3・4層は粘土である。そのうち1層は棺の陥没にともない、一部が棺方向へ流れている。2層は砂層で、棺の陥没にともない流入した層と考えられ、赤色顔料が検出されている（註1）。粘土槨の断面形状から、1号粘土槨と同じく、棺は割竹形木棺と考えられる。

3. 粘土槨の構築過程について

上記の堆積状況をふまえたうえで、粘土槨の構築過程について若干の検討をおこなう。

1号粘土槨 ①まず、地山を削平する。②棺を設置する箇所を浅く掘り込む。③周囲に盛土をする（13～16層）。④棺床粘土（9～12層）を設置する。⑤割竹形木棺を設置する。⑥棺内部に副葬品の配置、赤色顔料の塗布をおこなう。⑦棺蓋を設置する。⑧盛土（8層）をおこなう。ただし、②と③の先後関係については証明が不可能である。また、⑦と⑧の先後関係についても証明不可能なもの、8層が上部に続いていと仮定するならば、上記の順が想定される。一方、ここで面を形成し、葬送儀礼をおこなった可能性も想定される。

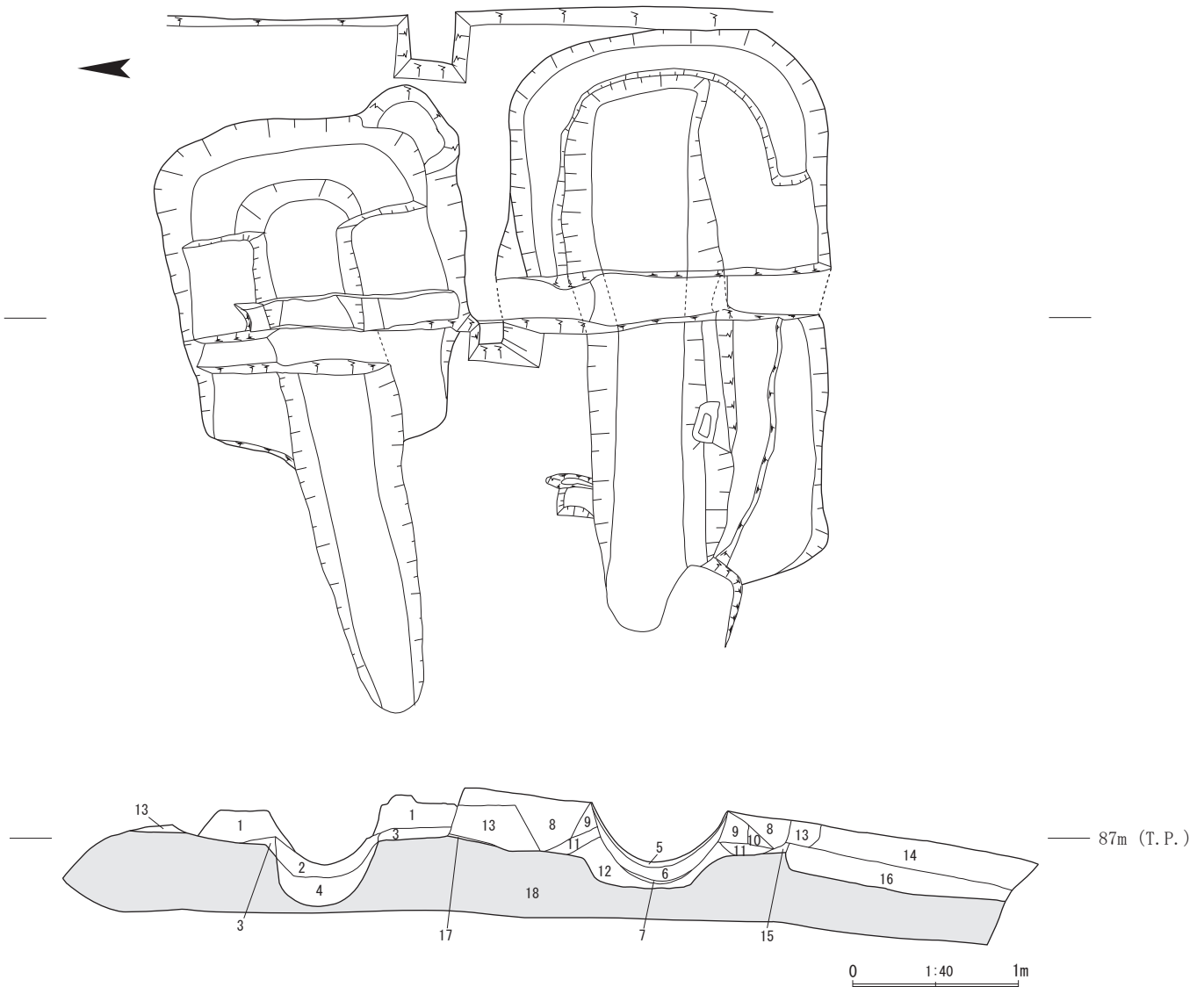
2号粘土槨 ①まず、盛土（13層および地山？）を削平する。②棺を設置する箇所を断面U字状に掘り込む。③棺床粘土（4層）を設置する。④棺側粘土（1・3層）を設置する。⑤割竹形木棺を設置する。⑥棺内部に副葬品の配置、赤色顔料の塗布をおこなう。⑦棺蓋を設置する。

両粘土槨とも上部の構造については不明だが、棺の陥没に伴い地山と同じ砂層の流入が認められる点は注目される。被覆粘土が薄いなど簡略化していた可能性が想定される。

以上、若干の推測を含むが、断面図から想定可能な粘土槨の構築過程を示した。

4. 粘土槨からみた安威0号墳の時期

安威0号墳は滑石製勾玉の副葬、さらには短冊形鉄斧と直刃鎌の副葬から、古墳時代前期末から中期初頭にかけての築造時期を想定できる（廣瀬



- | | |
|---------------------|----------------------------------|
| 1 青灰色粘土 | 10 青灰濁色粘土 (9層と同一と考えられるが、粘土がもろい。) |
| 2 黄褐色砂層 (赤色顔料を含む) | 11 青灰濁色粘土 |
| 3 青灰色粘土 | 12 青灰色粘土 |
| 4 青灰色粘土 | 13 白濁色砂層 (盛土) |
| 5 青灰色粘土 | 14 黄白色砂層 (盛土) |
| 6 黄濁色砂ジャリ層 | 15 黄濁色砂ジャリ層 (地山と16層の互層) |
| 7 黄濁色砂層 (上面に赤色顔料付着) | 16 黄濁色砂層 (盛土) |
| 8 黄色砂ジャリ層 (盛土) | 17 青灰色粘土層 (3層が浸食したもの) |
| 9 青灰色粘土 | 18 黄褐色砂層 (地山) |

図1 安威0号墳粘土槨 平面図・断面図

(右：1号粘土槨 左：2号粘土槨)

2014、河野・清水 2016)。

ここでは、先学の研究を参考に、粘土槨からみた安威0号墳の时期的な位置づけをおこない、副葬品からみた時期との整合性について検討しておきたい。

粘土槨の分類をおこなった都出比呂志は、土壇の底に直接粘土床を設置するもの (NA)、土壇

の底に円礫を厚く敷いた上に粘土床を設けるもの (NB)、土壇の底をU字形に掘りくぼめて粘土を貼りつけ粘土床とするもの (NC) に分類し、前期のなかでもNCを最も後出するものと位置づけた (都出 1979)。

中期以降、前期の粘土槨とは異なり、台状の棺床をもうけず掘り込みに棺を置く、墓壇底に礫敷

をおこなうなど大がかりな排水設備をもたない、被覆粘土が薄くなることなどが指摘されている(森下 2003)。

安威0号墳の1号粘土槨、2号粘土槨ともに地山を掘り込んで、粘土槨が構築されていた。また、被覆粘土は不明ではあるものの、簡略化されていた可能性を想定できる。

上記の粘土槨の特徴を踏まえると、粘土槨からみた安威0号墳の時期は、副葬品から想定される前期末から中期初頭にかけての時期と矛盾しないことになり、上記の見解を補強する材料となる。

5. おわりに

本稿では、安威0号墳の粘土槨を紹介した。1号粘土槨・2号粘土槨ともに礫敷を採用しない簡素な粘土槨である。一方、両者の違いに着目すると、以下の点を挙げることができる。①1号粘土槨は浅い掘り込みをもつものに対して、2号粘土槨は断面U字状の掘り込みをもつ。②1号粘土槨は棺床部と棺側部の違いは明瞭ではないのに対して、2号粘土槨は深い断面U字状の掘り込みの下部に棺床粘土を設け、掘り込みの肩上に棺側粘土を置く。③1号粘土槨は棺の周囲のみに棺床粘土を設置するのに対して、2号粘土槨は棺側粘土を掘り方いっばいに置く。

安威0号墳は副葬品から古墳時代前期末～中期初頭の築造時期が想定されており、かつ1号粘土槨と2号粘土槨はその位置関係から、近い構築時期が想定されている(廣瀬 2014)。以上を踏まえると、前期末から中期初頭にかけての短い間に、同一古墳内で粘土槨の構築に変化が認められることになる。

本稿は粘土槨の報告が主たる目的であり、この報告が安威0号墳の評価に少しでも寄与することを望む。

最後に、本稿の執筆にあたり、当時の調査担当者である奥井哲秀氏に多大なご教示をいただいた。また、粘土槨の平面図のデータを茨木市市史編さん室からご提供いただいた。記して、謝意を表します。

註

1) 奥井 1982 では、2層は「内部床面をきっちりとしたU字形にするために、砂を最も厚いところで約5cm

入れた」と考えられているが、本稿では1号粘土槨の6・7層と同様、棺の陥没にともない流入した層と考えた。これは2号粘土槨の出土状況図に記された遺物のレベルと齟齬は生じない。

参考文献 (五十音順)

- 上田直弥 2015 「粘土槨の展開過程とその画期-畿内の事例を中心に-」『考古学研究』62-3 考古学研究会 pp. 85-104
- 奥井哲秀 1982 「茨木市安威0号墳、1号墳の調査」『大阪文化誌』第15号 財団法人大阪文化財センター pp. 29-38
- 河野正訓・清水邦彦 2016 「茨木市安威0号墳から出土した鉄製品(1)」『茨木市立文化財資料館館報』第1号 茨木市立文化財資料館 pp. 1-4
- 都出比呂志 1979 「前方後円墳出現期の社会」『考古学研究』26-3 考古学研究会 pp. 17-34
- 服部聡志 1987 「大塚古墳の埋葬施設について」『豊中大塚古墳』豊中市教育委員会 pp. 161-169
- 廣瀬覚 2014 「安威古墳群」『新修茨木市史』第7巻史料編考古 茨木市史編さん委員会 pp. 266-273
- 森下章司 2003 「中期古墳の粘土槨系木棺埋葬」『古代日韓交流の考古学的研究-葬制の比較研究-』立命館大学 pp. 59-68